研究論文

カナダ・ウェスタン大学（Western University）教育系大学院における教育実践家向け学位プログラムと研究者向け学位プログラムの比較分析

－修士課程及び博士課程双方を対象として－

平田　　淳*

A Comparative Analysis on Similarities and Differences between the Graduate Degree Programs for Practitioners and Academics in the Field of Educational Studies at Western University, Canada:

Focusing on both Masters' and Doctoral Programs

Jun HIRATA

【要約】本稿は，カナダ・ウェスタン大学教育系大学院における実践家向けプログラムと研究者向けプログラムの類似点と相違点について，M.P.Ed.と M.A.，Ed.D.と Ph.D.の比較を通して分析した。結論としては，双方において，入学要件や受講形式，プログラム内の領域数と内容，修了要件とされるコースワーク数などそれぞれにおいて類似点と相違点が見られたが，最大の相違点としては研究者向けプログラムにおいてのみ学位論文の執筆及び執筆に至るまでの一連のプロセスを完遂しなければならないという点が挙げられる。他方で，M.P.Ed.では最終プロジェクト，Ed.D.では学校改善計画の作成がそれぞれ修了要件として課されており，それらが学位論文とどう異なるかを現地調査によって明らかにすることによって，はじめて両者の違いをより明確に指摘することができるものと思われる。

【キーワード】ウェスタン大学，M.Ed.，Ed.D.，M.A.，Ph.D.，

はじめに

筆者は，本誌掲載の別の拙稿（平田，2021a）において，教育系大学院の修士課程及び博士課程双方における実践家向けプログラムと研究者向けプログラムの比較軸として，次の３つを提示した。但し，拙稿の検討対象としたウェスタン大学（Western University）では，通常 M.Ed.（Master of Education）と称される教育実践家向け修士学位プログラムは M.P.Ed.（Master of Professional Education）という名称になっているため，ここではその名称を用いることとする。

① M.P.Ed.と Ed.D.
　同じ専門職向け学位プログラムとして，修士課程と博士課程ではどこがどう違うのか。
② M.P.Ed.と M.A.
　同じ修士課程として，専門職向けプログラムと研究者向けプログラムではどこがどう違うのか。
③ Ed.D.と Ph.D.
　同じ博士課程として，専門職向けプログラムと研究者向けプログラムではどこがどう違うのか。

*佐賀大学大学院学校教育学研究科

拙稿においては，ウェスタン大学教育系大学院の学位課程について，これら３つの比較軸のうち①について分析した。本稿においては，同じくウェスタン大学教育系大学院の学位課程について，残りの②と③についてそれぞれ比較分析し，そのうえで修士・博士両課程併せて，実践家向け学位プログラムと研究者向け学位プログラムを全体として比較分析することとする。その際，M.P.Ed.と Ed.D.プログラムの概要については既に拙稿で詳述しているため，本稿ではそれらは割愛し，M.A.プログラムと Ph.D.プログラムの概要を検討したうえで，M.A.と M.P.Ed.の比較，及び Ph.D.と Ed.D.との比較をそれぞれ順に行うこととする。第３節では M.P.Ed.と M.A.の，第４節では Ed.D.と Ph.D.の比較をそれぞれ試みるが，M.P.Ed.と Ed.D.両プログラムの詳細に関しては，適宜拙稿を参照されたい。

1.　M.A.プログラムの概要[1]

ウェスタン大学教育系 M.A.プログラムは，高度な学術的スキルを構築することができる研究に特化した学位プログラムであり，４つの専門領域から構成される。就学形態はフルタイムを基本としており，受講形態はオンサイト形式（対面式）である。修了までには大体２年間かかるとされている[2]。入学に際しては，認定された大学から授与された４年制学位（20 フルコースあるいはそれと同等）と後半２年間の成績が最低でも B（70%）であることが必須要件として，優等学位を得ていること，教員免許に通じる資格（例えば教育学士号（B.Ed.）を有していること，少なくとも１年の教職経験あるいは教育分野での経験があることの３つが推奨条件とされていることは，M.P.Ed.プログラムと同様である。また以上の要件は応用心理学領域以外に当てはまるが，当該領域はより厳格な要件が設けられている（後述）。また，注意事項及び例外として， B.Ed.及び AQ（Additional Qualifications，教員追加資格）[3]の成績は入学要件としての成績を算出する際には含まれないこと，３年制の学位を有する申請者は，申請したプログラムの学生数に空きがある場合，その入学がケースバイケースで考慮され，専門職としてのセッティングにおける教育者としての成功体験はその際勘案されることなども，M.P.Ed.プログラムと同様である。また，申請者が上記の入学要件を満たしていない場合（例えば成績が 70%未満であるとか３年制学位しか取得していないような場合），申請者は条件付きで暫定的な学生として入学許可を受けることがあり得ることも M.P.Ed.プログラムと同様であるが，その際の条件が，M.P.Ed.プログラムでは受講する各授業の評価を平均 75%に維持することでクリアされ得るとされているのに対し，M.A.プログラムでは秋学期中に２ハーフコースの授業をともに平均 75%の成績で修得することが要件とされている。パートタイムでの就学も例外的に認められる場合もあるが，その場合は秋・冬学期にそれぞれハーフコース１つずつを 75%平均の成績で習得することが求められる[4]。出願時の応募書類としては，履歴書（Personal Information and Academic History），推薦書，成績証明書，志望動機書，10－20 頁のライティング・サンプル，英語が第一言語ではない場合は英語の能力資格証明文書（TOEFL など），等である[5]。

M.A.プログラムの４つの専門領域とは，①批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域（Field of Critical Policy, Equity, and Leadership Studies），②学校応用児童心理学領域（Field of School and Applied Child Psychology），③応用言語学領域（Field of Applied Linguistics），④カリキュラム論領域（Field of Curriculum Studies）の４つである。以下，それぞれについて見ていくこととする。

---

[1] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/ma/index.html（2020 年 10 月 13 日採取）。
[2] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/ma/index.html#learn-more（2020 年 9 月 22 日採取）。
[3] AQ について詳しくは，（平田，2020a）を参照されたい。
[4] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/admission-contact/admission html#（2020 年 9 月 22 日採取）。
[5] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/admission-contact/apply html（2020 年 10 月 12 日採取）。

(1)　批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域[6]

本領域の M.A.プログラムでは，専門領域における基礎的知識，理論的方法論的アプローチ，多様な視点，鍵となる問題と現在の議論を学生に提示するものである。本領域担当教員の専門分野は，「先住民教育」，「教育における批判的政策」，「エクィティ，ジェンダー，LGBT」，「教育的リーダーシップ」，「グローバリゼーションと国際教育」であり，学生にはこれら専門分野の間の交わりや，各専門領域のローカルな，国家的及び地球的文脈間の相互接続をどのように理解するのかの機会が提供される。つまり，学生は「教育における批判的政策学（Critical Policy Studies in Education）」，「エクィティ・社会正義教育（Equity and Social Justice Education）」，「グローバリゼーション・国際教育（Globalization and International Education）」，「教育におけるリーダーシップ（Leadership Studies in Education）」の４分野から１つ以上に焦点を当てて研究を行うことになる。

本領域では，修了までの道のりとして，２つのプログラム・パスウェイが準備されており，学生はそのうち１つを選択することになる。即ち，修士研究プロジェクト（Master's Research Project: MRP）パスウェイと，修士論文（Master's Thesis）パスウェイである。MRP パスウェイでは授業８コースの習得と MRP の作成，修士論文パスウェイでは授業６コースと修士論文の執筆が修了要件とされている。授業としては，次に挙げる必修のハーフコースの授業２つと履修が推奨される５コースから４つ，その他選択コース（Elective Courses，上記以外の M.A.プログラム本領域所属学生が履修可能なコース[7]）を必要な数だけ習得することになる。典型的な履修例としては，修士論文パスウェイの学生は１年目秋・冬学期で各３コース計６コースを，MRP パスウェイの学生は１年目秋・冬学期で各３コースに夏学期に２コースを受講し，要件を満たすことが多いということである。

〇必修科目

- ED 9200 教育の社会的文脈（Social Context of Education）
- ED 9201 教育調査イントロダクション（Introduction to Educational Research）

〇推奨科目

- ED 9202　教育における批判的政策学（Critical Policy Studies in Education）
- ED 9629　教育におけるエクィティと社会正義（Equity & Social Justice in Education）
- ED 9507　リーダーシップ修了演習（Graduate Seminar in Leadership）
- ED 9203　グローバリゼーションと教育（Globalization and Education）
- ED 9204　先住性と（脱）植民地化的調査（Indigeneity and (De)colonizing Research）

ところで，修士論文パスウェイの学生が修士論文を完成させるためのプロセスは次のように説明されている。まず，学生は要求されている６つのコースワークを習得した後，「ED 9683 プロポーザル（研究計画書）準備のための個人コース（Individual Proposal Preparation (IPP)）」を履修登録することになる。その際，学位論文のテーマを決めておく必要がある。IPP は学位論文プロポーザルを作成するための構造を提供することとされている。IPP を作成する段階では，方法論的枠組みや活用されるデータ収集方法について学び，それらを形成することになる。倫理事項も考慮され，適当な場合には倫理審査文書も準備することになる。IPP は授業ではないが，学位論文執筆のための道標（milestone）であり必須要件であ

[6] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/ma/cpels html（2020 年 9 月 22 日採取）。

[7] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/documents/ResearchIntensiveCourseDescriptions.pdf（2020 年 9 月 22 日採取）に，M.A.及び Ph.D.の学生受講用の約 100 の授業の内容が記載されているので，参照されたい。

る。IPP は一学期間で作成を終了し，プロポーザルと倫理審査用文書の提出をもって完了となる。

指導教員はその他の関連する教員と協議した後に，学位論文助言委員会（Thesis Advisory Committee，以下「助言委員会」）を公的に組織する。助言委員会は指導教員及び，助言委員会委員となる教員一名から構成される。助言委員会が学生が作成したプロポーザルの内容に納得した場合，学生はプロポーザルと「M.A.学位論文プロポーザル承認フォーム（MA Thesis Proposal Approval form）」を大学院プログラム事務局に提出し，大学院プログラムの副研究科長（Associate Dean of Graduate Programs）の承認を求めることになる。当該研究が人間を対象としたものである場合，学生はウェスタン大学研究倫理審査委員会（Western University Research Ethics Board）から調査実施前に承認を得なければならない。これらすべての承認が得られて初めて，学生は調査を実施することができる。

上記の承認すべてが得られたのち，学生は「ED 9590 修士論文（Master's Thesis）」の履修登録を行い，学位論文指導委員会（Thesis Supervisory Committee，以下「指導委員会」）指導の下，研究を進めることになる。IPP 同様，ED 9540 は授業科目としての単位数はカウントされないが，必修である。修士論文が完成し，指導委員会による承認を受けた後，学生は学位論文審査申請書（Application for Thesis Examination - Form B and Master's Thesis Supervisor Approval Form）を大学院プログラム事務局に提出する。大学院プログラム事務局は関連する大学院規則に則って学位論文審査のための必要な手続きを採り，これらのプロセスをすべて終えて修士号の取得ということになる。

(2)　学校応用児童心理学領域[8]

M.A.プログラムの学校応用児童心理学領域においては，以下のような，上述したプログラム全体の入学要件よりも詳細かつ厳格な要件を満たすことが求められている。

- ４年制大学の優等学位
- 学部での学位論文，あるいはそれと同等の調査及び執筆経験。
- 学部での統計学あるいは量的調査のハーフコース分の単位（0.5 単位）が取得済みであること。そうでなければ，入学後 1 年目に「9621 量的調査イントロダクション（Introduction to Quantitative Methods）」を習得すること。
- 児童発達についてのハーフコース分の単位。
- 学部での成績が平均で 80%以上であること。
- 入学許可が下りる前に，学位論文指導教員になってほしい教員からその旨の承諾を得ておくこと。申請者は申請段階で指導教員になってほしい教員と連絡をとっておくこと。また，申請書には指導教員について第三志望まで記入しておくこと。
- 留学生は，アイエルツ（International English Language Testing System: IELTS）の平均点が 7 点以降であり，各スケールで最低でも 6.5 以上であること。また，スカイプを使ったインタビューが実施される。

例えば，他領域では優等学位は「推奨（recommended）」条件になっているが必須要件とはなっていないし，統計学や量的調査，児童発達に関する予備知識が問われることもない。入学前に指導教員の承諾を得ておくことも，他領域では求められていないなど，当該領域は他領域よりも入学のハードルが高いと言えよう。

[8] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/ma/applied-psychology.html（2020 年 9 月 22 日採取）。

本領域のプログラムはフルタイム・ベースで提供されており，受講形態はオンサイトである。修了までには６学期（２年）かかるのが一般的である。修了要件としては，次の６つのハーフコースの授業の習得と学位論文の執筆が挙げられている。MRP オプションはない。9811 以外の５科目は１年目に，9811 は２年目に履修することが推奨されている。学位論文執筆のプロセスは，批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域と同様である。

○　9651　通常教育及び特別支援教育における評価（Assessment and Evaluation in Regular and Special Education）
○　9653　応用心理学における倫理的専門的諸問題（Ethical and Professional Issues in School and Applied Psych）
○　9705　上級量的調査方法（Advanced Quantitative Research Methods）
○　9801　学校教育の心理社会的側面（Psychosocial Aspects of Schooling）
○　9806　例外性（Exceptionalities）
○　9811　認知的学術的関与（Cognitive and Academic Interventions）

(3)　応用言語学領域[9]

応用言語学領域も批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域と同様，学位論文ベースのパスウェイと MRP ベースのパスウェイがあり，学生はどちらかを選択することになっている。学位論文ベースの学生の修了要件は６ハーフコースの習得と学位論文の執筆であり，６ハーフコースのうち「9678　多様な伝統－教育調査イントロダクション（Diverse Traditions: Introduction to Educational Research）」ともう１つの調査方法論に関する授業（例えば「9621　量的調査方法イントロダクション（Introduction to Quantitative Research Methods）」）の 2 科目は必修であり，残る４科目は以下の選択科目から習得することになっている。MRP ベースの学生は８コースの習得と MRP である。

○　教育における質的調査（Qualitative Research in Education）
○　上級量的調査方法（Advanced Quantitative Research Methods）
○　ボキャブラリー教育と学習（Teaching and Learning Vocabulary）
○　文法教育と学習（Teaching and Learning Grammar）
○　第二言語評価（Second Language Assessment）
○　言語学習と教育への社会的アプローチ（Social approaches to language learning and teaching）
○　言語教員教育（Language Teacher Education）
○　言説研究と言語教育（Discourse analysis and language teaching）
○　第二言語学習と教育を理解する（Understanding second language learning and teaching）
○　コンピューター支援の言語学習（Computer-assisted language learning）
○　シラバスと教材デザイン（Syllabus and materials design）
○　言語とリテラシー教育における批判的諸問題（Critical Issues in Language & Literacy Education）
○　カリキュラム論イントロダクション（Introduction to Curriculum）
○　初期のリテラシー・カリキュラム，教授法と学習（Early Literacy Curriculum, Pedagogy, and Learning）
○　批判的教授法（Critical Pedagogy）

[9] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/ma/applied-linguistics.html（2020 年 9 月 24 日採取）。

○　グローバリゼーションと教育（Globalization and education）
○　言語，アイデンティティ，教授法（Language, Identity, Pedagogy）
○　カリキュラムにおける上級トピック（Advanced Topics in Curriculum）

受講形態としてはフルタイムが基本だが，パートタイムでの受講も可能なようである。フルタイム学生は通常修了まで６学期（２年）間を要し，学位論文パスウェイの学生の大部分は１年目秋学期に選択科目を３つ，冬学期に上記の「9678 多様性と伝統－教育調査イントロダクション」ともう１つの調査方法論の授業，及び選択科目を１つ習得し，学位論文執筆のプロセスに入る。学位論文執筆のプロセスは，上記２領域と同様である。パートタイムの学生はまちまちであるが，１学期に２科目までしか履修できないため，多くの場合修了まで９学期（３年）間かかる。MRP パスウェイの学生は１年目秋学期に３科目，冬学期に３科目，夏学期に２科目習得する例が多い。

(4)　カリキュラム論領域[10]

カリキュラム論領域では，学生は，幼児教育，マルチリテラシー（Multiliteracies），数学教育，カリキュラムと教授法の４エリアから１つ以上のフォーカスを選択することになる。また当該領域には，批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域や応用言語学領域と同様，６科目のコースワークと学位論文執筆から成る学位論文パスウェイと，8 科目のコースワークと MRP から成る MRP パスウェイがある。学位論文パスウェイで習得が求められる６科目のうち，２科目は次の必修科目であり，４科目は次の選択科目リストから選択することになる。学位論文執筆のプロセスは，批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域や応用言語学領域と同様である。

○　必修
・　9678　多様な伝統－教育調査イントロダクション（Diverse Traditions: Introduction to Educational Research）
・　9580 カリキュラム論イントロダクション（Introduction to Curriculum）
○　選択科目
・　仮想世界における教育（Teaching in a Virtual World）
・　変容する世界における言語とリテラシー・カリキュラム，教授法と学習（Language and Literacy Curriculum, Pedagogy, and Learning in a Changing World）
・　マルチリテラシーーテクストとコンテクスト（Multiliteracies: Texts and Contexts）
・　マルチリンガリズムとマルチリテラシーーグローバル世界における言語・リテラシー教育（Multilingualism and Multiliteracies: Teaching Language and Literacy in a Globalized World）
・　青年期のリテラシーーカリキュラム，教授法と学習（Adolescent Literacy: Curriculum, Pedagogy, and Learning）
・　数学における教育と学習（Teaching & Learning in Mathematics）
・　数学カリキュラム－批判的評価（Mathematics Curriculum: A Critical Appraisal）
・　数学，科学とテクノロジー教育－政策と社会（Mathematics, Science, and Technology Education: Policy and Society）
・　科学における学習（Learning in Science）

[10] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/ma/curriculum-studies html（2020 年 9 月 24 日採取）。

- 科学と科学教育（Science & Science Teaching）
- 教育についての語りー教授法的言説と実践の諸形態（Talking About Teaching: Forms of Pedagogic Discourse & Practice）
- 教育分析ー理論と実践の橋渡し（The Analysis of Teaching: Bridging Theory & Practice）
- ナラティブの探究ー教員, ストーリー, 批判的ペダゴジー（Narrative Inquiry: Teachers, Stories & Critical Pedagogy）
- アクション・リサーチー研究者としての教員（Action Research: Teachers as Researchers）
- 教師教育（The Education of Teachers）
- 早期リテラシー・カリキュラム，教授法と学習（Early Literacy Curriculum, Pedagogy, and Learning
- Adult Education & Lifelong Learning）
- 言語・リテラシー教育における批判的諸問題（Critical Issues in Language & Literacy Education）
- 児童生徒の学習評価（Assessing and Evaluating Student Learning）
- カリキュラム，学校と社会（Curriculum, School & Society）
- 量的調査方法（Quantitative Research Methods）
- 教育における質的調査（Qualitative Research in Education）
- カリキュラム特論ーインクルーシブで国際的な数学（Special Topics in Curriculum: Inclusive and International Mathematics）
- カリキュラム特論ー小さな子どもを理解する（Special Topics in Curriculum: Understanding the Young Child）

就学形態は，フルタイムあるいはパートタイムであり，前者は修了まで通常２年間，後者は３年間かかる。フルタイム学生は通常修了まで２年間を要し，学位論文パスウェイの学生の大部分は１年目秋学期に必修科目の「9580 カリキュラム論イントロダクション」と選択科目を２つ，冬学期にもう一つの必修科目である「9678 多様性と伝統ー教育調査イントロダクション」と選択科目を２つ習得し，学位論文執筆のプロセスに入る。学位論文執筆のプロセスは，批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域や応用言語学領域と同様である。パートタイムの学生はまちまちであるが，１学期に２科目までしか履修できないため，多くの場合修了まで 9 学期（３年）間かかる。MRP パスウェイの学生は１年目秋学期に３科目，冬学期に３科目，夏学期に２科目習得する例が多い。

2. Ph.D.プログラムの概要[11]

Ph.D.プログラムは，「批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域（Field of Critical Policy, Equity, and Leadership Studies）」，「カリキュラム論領域（Field of Curriculum Studies）」，「応用言語学領域（Field of Applied Linguistics）」，「学校応用児童心理学（Field of School and Applied Child Psychology）」の４領域から構成されている。４領域とも M.A.プログラムでも提供されており，研究者養成学位課程としての連続性があるということになっている。入学要件としては，前三者に関しては次のように規定されている。すなわち，教育学分野における調査を行って取得した修士号あるいは認定された大学からの同等の資格を有すること，通常は入学前の大学院プログラムで A（80%）の成績あるいはそれと同等の成績を収めていること，修士論文，修士調査プロジェクト（Masters Research Project: MRP）あるいは博士課程入学委員会（Doctoral Admissions Committee）及び大学院プログラム副研究科長（Associate Dean of Graduate

[11] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/phd/index html（2020 年 10 月 13 日採取）。

Programs）により認められたリサーチ・ペーパーのような学術研究能力を示すもの，明確な研究計画書，等である。応募書類は基本的に M.A.と同様であるが，ライティング・サンプルが M.A.では 10－20 頁であったのが Ph.D.では 15－20 頁とされている[12]。また推奨事項として，教育的セッティングにおける専門的資格と職務経験（教職経験その他）があることが望ましいとされている[13]。学校応用児童心理学については，他領域より入学要件が厳格になっているため，後述する。その他各領域に共通している事項としては，修了までには大体４年間かかること，受講形態はオンサイト（対面式）であること，研究に特化したプログラムであること，学位論文執筆が修了要件となっていること，などである。

(1)　批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域[14]

当該領域の M.A.プログラムと同様，Ph.D.プログラムにおいても学生は「先住民教育」，「教育における批判的政策」，「エクィティ，ジェンダー，LGBT」，「教育的リーダーシップ」，「グローバリゼーションと国際教育」の５つのフォーカスから１つ以上を選択して研究を進めることになっている。修了までの要件としては，６ハーフコースの習得と Ph.D.資格試験の合格及び Ph.D.論文の執筆とされている。

６つのハーフコースとしては多くの場合，１年目秋・冬学期２学期を跨る形（２ハーフコースに相当）で「ED 9715　Ph.D.演習（Ph.D. Seminar）」を履修し，秋学期には選択科目を２つ，冬学期には「ED 9705 量的調査方法（Quantitative Research Methods）」あるいは「ED 9711　教育における質的調査（Qualitative Research in Education）」のいずれか１つに加えて選択科目を１つ，習得することになる。選択科目としては，本領域 M.A.プログラムの必修及び選択科目として挙げられている上述の７科目から選択することになる。１年目の冬学期が終わると，Ph.D.論文執筆資格試験（Qualifying Examination，以下「資格試験」）を１学期で終えなくてはならない。その後 Ph.D.の学位論文執筆に入る。

コースワークを終えた後に始まる資格試験は，資格レポート（qualifying paper）の審査を通して行われる。資格レポートは方法論部分と理論部分から構成され，幅広い教育的文脈の中に自らのテーマを位置付けることが求められる。語数制限は 6,000－8,000 語である[15]。

資格試験に合格すると，次はプロポーザル（Thesis Proposal，研究計画書）の作成に入る。「ED 9790 Ph.D.学位論文（Ph.D. Thesis）」の履修登録を行い，指導教員及びその他の教員と協議の上，学位論文助言委員会が公式に発足される。助言委員会の構成は，指導教員及び少なくとも１名の教員である。学生は Ph.D.資格試験合格後６か月以内に助言委員会に対しプロポーザルを提出し，口頭試問を受けなければならない。口頭試問はその他の教員や大学院生に対しても公開で行われる。口頭試問合格後，研究テーマが人間を対象とする調査を含む場合，ウェスタン大学研究倫理委員会（Western University Research Ethics Board）から研究実施の承認を得なければならない。以上のプロセスをすべてクリアして初めて，学位論文のための調査実施に入ることができ，学位論文が完成すると審査を受けパスすれば，学位授与ということになる[16]。

---

[12] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/admission-contact/apply.html（2020 年 10 月 13 日採取）。
[13] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/admission-contact/admission.html（2020 年 9 月 28 日採取）。
[14] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/phd/cpels html（2020 年 9 月 28 日採取）。
[15] Ph.D.資格試験について，詳しくは次の URL を参照されたい。https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/documents/research/PhDQEGuide2012andlater.pdf（2020 年 9 月 28 日採取）。
[16] M.A.及び Ph.D.双方の学位論文審査プロセスについては，次の URL を参照されたい。https://grad.uwo.ca/administration/regulations/8.html（2020 年 9 月 28 日採取）。

(2)　カリキュラム論領域[17]

カリキュラム論領域の Ph.D.プログラムでは，M.A.プログラムと同様，学生は，幼児教育，マルチリテラシー（Multiliteracies），数学教育，カリキュラムと教授法の４エリアから１つ以上のテーマを選択することになる。修了までには６ハーフコースの習得と，理解度試験（Comprehensive Exam）の合格，そして学位論文の執筆が課される。１年目秋・冬学期には「ED 9715　Ph.D.演習（Ph.D. Seminar）」（２ハーフコースに相当）を履修し，秋学期には選択科目を２コース，冬学期には「ED 9730　カリキュラム論における上級トピック（Advanced Topics in Curriculum）」に加えて「9705　量的調査方法（Quantitative Research Methods）」か「9711　教育における質的調査（Qualitative Research in Education）」のいずれかを履修することが強く推奨されている。選択科目としては，上述の M.A.プログラムの選択科目として挙がっている中から選択することになる。

Ph.D.プログラム修了の要件の一つである理解度テストの学生にとっての目的は，学生が自分の研究テーマに関して有する情報の深さとその知見の広さを示すことである。学生にはその研究テーマに関する問が１問与えられ，学生はそれに 8,000 語から 10,000 語のペーパーを準備して回答することになる。内容としては，カリキュラム論における自分の研究テーマの歴史と現状に関する知見を示し，研究計画及び研究計画と研究テーマの関連性について記述することが求められる。例えば，当該研究計画に関連するテーマについて知見の現状はどうなっているのか？それは当該領域における歴史的伝統や現在の実践をどう結集するあるいはしないのか？それは当該領域における知見をどう進歩させるのか？などである。学生は自分のペーパーを指導教員を含む誰とでも議論していいが，その原稿を見せてはならないことになっている。

理解度試験のプロセスはコースワークの終了後直ちに始めなければならず，１学期内で終了させなければならない。また，学生は理解度試験のプロセスを始めた学期の末の４週間前までに，理解度試験ペーパーのデータを提出しなければならない。指導教員及び論文助言委員会委員一名あるいは当該領域の知見を有するその他の教員はペーパーを読んだ後，可否（satisfactory/unsatisfactory）の決断を２週間以内に別々に下すことになっている。ペーパーが合格するには二名とも可の判断を下していなければならない。否であった場合，学生は２週間以内に修正版を提出することができる。修正版の審査でも否と判断された場合，当該学生は当該プログラムを退学するよう求められる。ペーパーが可であれば，学位修了の次の段階，つまり学位論文執筆のプロセスに入ることができる。プロポーザルの審査をパスし学位論文を執筆，これを完成させ，指導教員及び助言委員会から承認を得た後，公的な審査プロセスに入り，審査をパスすれば学位授与ということになる。

(3)　応用言語学領域[18]

応用言語学領域の Ph.D.プログラムも他の領域同様，オンサイト（対面式）の受講形態をとり，４年で修了するようデザインされている。多くの場合，初めの２学期でコースワークを終え，その後理解度テストとプロポーザル，学位論文の執筆と審査を経て学位取得に至るというプロセスを辿ることになる[19]。

コースワークとしては，６ハーフコースの習得が求められている。多くの学生は，次のような形でコースワークを行っていく。即ち，１年目秋・冬学期と２学期を跨る形で「ED 9715　Ph.D.演習（Ph.D.

---

[17] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/phd/curriculum-studies.html（2020 年 9 月 28 日採取）。
[18] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/phd/applied-linguistics.html（2020 年 9 月 29 日採取）。
[19] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program-brochures/PhD_Applied_Linguistics_Web.pdf（2020 年 9 月 29 日採取）。

Seminar)」（２ハーフコース分に相当）を受講し，秋学期にはその他２つの選択科目，冬学期には「ED 9705　量的調査方法（Quantitative Research Methods)」あるいは「ED 9711　教育における質的調査（Qualitative Research in Education)」のいずれかを受講した上で選択科目を１ハーフコース受講する。合計で６ハーフコースとなる。選択科目は，M.A.プログラムにおける選択科目と同様のものである。上述の通り，ハーフコース修了後直ちに「ED 9789　Ph.D.理解度試験（Ph.D. Comprehensive Examination)」を登録し，理解度試験を受ける。合格したら「ED 9790　Ph.D.学位論文（Ph.D. Thesis)」を登録し，プロポーザルの作成・審査，学位論文の執筆・審査，そして Ph.D.学位の取得へといった一連の流れは，カリキュラム論領域と同様である。

(4)　学校応用児童心理学領域[20]

本領域の Ph.D.プログラムへの入学要件は，その他３領域共通の要件をベースとして，それよりもいくらか厳格に規定されている。まず，修士の学位であるが，学位論文執筆を要件とした修士課程を修了していることが求められている。つまり，ウェスタン大学の場合は M.P.Ed.プログラムから Ph.D.への進学はできないということになる。また領域も臨床心理学，認知心理学，カウンセリング心理学，発達心理学，教育あるいは学校心理学における修士号に限定されている。申請前の大学院での成績が A (80%) あるいはそれと同等という要件は他領域と同様となっている。学校応用児童心理学領域では，M.A.と Ph.D.の一貫性を重視しているため，申請者が学校応用心理学における M.A.の学位を持っていない場合，成績証明書を検討して入学の可否を判断することになる。Ph.D.への入学が許可された場合でも，取得した M.A.の学位が入学要件とされる M.A.の学位と内容的に同等ではないとされた場合（例えばウェスタン大学 M.A.プログラムで習得することが求められる内容の授業を他大学の M.A.プログラムで習得していないような場合)，M.A.プログラムにおける授業のいくらかを習得することが求められる場合があり，受けるべき授業一覧は入学許可書に添付される。例えば，心理学的実践における倫理事項に関する授業を M.A.段階で受けずに Ph.D.プログラムに入学を許可された場合，Ph.D.プログラムの１年目にその内容の授業を習得しなければならないこととされている。このように M.A.プログラムの受講が付加的に求められることについては，不服申し立てが可能となっている[21]。

学位取得までの要件としては，まず６ハーフコースの習得が求められる。受講するコースとしては，１年目秋学期に「9809　包括的子ども・青年アセスメントⅠ（Comprehensive Child and Adolescent Assessment I)」，「9802　心・脳と教育（Mind, Brain, and Education)」，「9803（子ども期と精神病理学（Childhood Psychopathology)」を，冬学期に「9810　包括的子ども・青年アセスメントⅡ（Comprehensive Child and Adolescent Assessment II)」と「9808　相談と協働（Consultation and Collaboration)」，夏学期に「9813　子ども・青年関与（Child and Adolescent Intervention)」をそれぞれ受講することになる。また，６ハーフコースには含まれないが受講が求められるものとして，１年目から３年目までの３年間毎年の秋・冬学期に開講される無単位のコース「9800　専門的ケース演習（Professional Case Seminar)」がある。加えて，１年目冬学期に「9805　実習１（Practicum 1)」と２年目秋・冬学期に「9812　実習２（Practicum II)」の併せて 600 時間の実習の受講と，４年目の秋・冬・夏学期に実施されるインターンシップへの参加も求められている[22]。これだけ多くの実践経験を積むことは，Ph.D.プログラムの他領域では要件とされていない。

---

[20] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/phd/applied-child-psychology.html（2020 年 9 月 29 日採取)。
[21] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/phd/applied-child-psychology.html（2020 年 9 月 29 日採取)。
[22] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/documents/research/PhDSchoolPsychHandbook_August2017.pdf（2020 年 9 月 29 日採取)。

コースワークの習得を終えると，博士論文執筆資格試験（Qualifying Exam）の準備に入る。これは「批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域」の Ph.D.プログラムの箇所で言及した資格試験と同様のものであり，資格ペーパーは指導教員及びその他の教員一名の二名によって査読され，二名の教員は別々に結果を「合・否（pass or fail）」で判定する。一人でも「否」の判定を出すと，再提出に向けての修正のため，２週間の猶予が与えられる。資格審査に合格した後は，他領域同様，プロポーザルの作成・審査, 倫理委員会による審査, Ph.D.学位論文の執筆・審査と続き, 一連の審査にすべて合格した場合に Ph.D.の学位が授与される[23]。

3. M.P.Ed.と M.A.の比較分析－同じ修士課程として，専門職向けプログラムと研究者向けプログラムではどこがどう違うのかー

まず入学要件であるが，M.P.Ed.と M.A.はほぼ同様である。異なるのは，申請者が入学要件を満たしていない場合に暫定的な学生として入学許可を受けることができる条件である。即ち，M.P.Ed.プログラムでは受講する各授業の評価を平均 75%に維持することでクリアされ得るとされているのに対し, M.A.プログラムでは秋学期中に２ハーフコースの授業をともに平均 75%の成績で修得することが要件とされている。つまり，入学要件において両者に大きな差異はない。応募書類もほぼ同様である。ちなみに，M.P.Ed.と日本の教職大学院との大きな違いは，M.P.Ed.プログラムの入学要件として教員免許の保有が求められていないことである。これは，ブロック大学（平田，2019）やトロント大学大学院オンタリオ教育研究所（Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto: OISE）（平田，2020b）がそうであったように，M.Ed.や M.P.Ed.が教育実践家向けの大学院学位プログラムであるとしても，そこでの「教育」とは「学校教育」に特化されているわけではなく，教育的要素を含む多くの他の職業（看護師や NPO 職員，大学職員など）も想定しているため，ウェスタン大学 M.P.Ed.プログラムでも教員免許保有を入学要件としていないと解することができよう。

就学形態としては，基本的に双方ともフルタイムのプログラムであるが，M.A.ではパートタイムでの就学も例外的に認められる場合もある。但し，１学期で３つの授業を習得することが求められる M.A.では就学中の就業は「限定的」とされているのに対し，１学期に授業１つのみ受講することが想定されている M.P.Ed.では多くの領域で可能とされている。これは，M.A.が研究者向けプログラムであるのに対し，M.P.Ed.が実践家向けプログラムであるが故であろう。受講形態としては M.A.がオンサイト（対面式）であるのに対し，M.P.Ed.ではほとんどの領域でオンラインとなっており，この点は大きな相違である。修了までにかかる期間は，共に２年間であるが，求められるコースワークは，M.P.Ed.では８つであるのに対し，M.A.は６つと少なくなっているが，その分 M.A.では修士論文の執筆が求められることになっている。

プログラム内の領域数としては，M.P.Ed.が応用行動分析領域，カリキュラム・ペダゴジー領域，幼児教育領域，教育的リーダーシップ領域，先住民教育における教育的リーダーシップ領域，エクィティ・多様性・社会正義領域，国際教育領域，数学教育領域，他言語話者のための英語教育領域（TESOL），例外的な能力をもった児童生徒への教育領域の 10 の専門領域から構成されるのに対し，M.A.は批判的政策・エクィティ・リーダーシップ領域，学校応用児童心理学領域，応用言語学領域，カリキュラム論領域の４領域である。M.P.Ed.で細分化された領域をいくつかに統合したものが M.A.の各領域を構成しているようである。即ち，M.P.Ed.の教育的リーダーシップ領域，先住民教育における教育的リーダーシップ領域，エクィティ・多様性・社会正義領域，国際教育領域を併せる形で，M.A.では批判的政策・エク

[23] https://www.edu.uwo.ca/graduate-education/program/phd/applied-child-psychology.html（2020 年 9 月 29 日採取）。

ィティ・リーダーシップ領域が置かれているように見えるし，M.P.Ed.の応用行動分析領域と幼児教育領域は M.A.では学校応用児童心理学領域がこれらを含むであろう。また，M.A.のカリキュラム論領域は，M.P.Ed.のカリキュラム・ペダゴジー領域と TESOL 領域，数学教育領域を併せたようなコースワークの内容となっている。そう考えると，本誌掲載の別の拙稿（平田，2021b）で，近年カナダの教育系大学院では M.A.と M.Ed.の明確な差異化を図る傾向にあるという指摘をしたが，研究テーマのみを見ると，多くのテーマは M.P.Ed.でも M.A.でもどちらでも学べるようにはなっており，やはり修士論文を課すかどうかが最大の差異化要因であるということも言えるであろう。但し留意すべきは，修士論文執筆にはその前段階でプロポーザルを作成し倫理審査を受ける必要があるなど一連のプロセスがあり，それらをすべてセットとして考えると，単に修士論文を書く書かないという問題以上に大きな相違を生み出しているということは言えよう。但し, M.P.Ed.の多くの領域で課される「最終プロジェクト（Capstone Project）」にも，終了まで一連のプロセスを踏む必要があり，両者の相違を検討することなしに，その相違が実体的なものなのかどうかを判断することはできない。この点は，現地調査を通して明らかにする必要がある。

4. Ed.D.と Ph.D.の比較分析－同じ博士課程として，専門職向けプログラムと研究者向けプログラムではどこがどう違うのかー

Ed.D.の入学要件としては，申請者は通常５年以上のフルタイムでの就労経験を有していることと修士の学位を有していること，GPA のスコアが最低でも 3.5 あることが求められる。取得している修士号としては，教育的リーダーシップあるいは教育行政学におけるものが望ましいが，それ以外の領域の修士号であっても出願できる。修士の学位が実践家向け学位である必要性については，言及はない。応募時の提出書類としては，志望理由書（Statement of Intent），推薦書３通（大学の指導教員や職場の上司など），成績証明書，執筆能力を証明するためのライティング・サンプル（writing sample）15－20 頁，及び履歴書である。志望理由書と履歴書には，教育者としての教育上及びリーダーシップ上の経験がどのように教育的リーダーシップ領域の博士課程受験に繋がったのかについて明記しておく必要がある。申請者が英語を第一言語としていない場合，英語能力に関する証明書（TOEFL など）を提出しなければならない。Ph.D.の入学要件と比較すると，Ed.D.が５年以上のフルタイムでの就労経験を有していることが要件とされている点が，まず第一の相違点として挙げられる。それは，Ed.D.が実践家向け学位プログラムであるが故の当然の帰結であろう。次に，修士の学位を有しているという要件については，両学位プログラムともに同様である。但し，Ph.D.では基本的には修士論文あるいは修士調査プロジェクトまたは博士課程入学委員会及び大学院プログラム副研究科長により認められたリサーチ・ペーパーのような学術研究能力を示すものを有していることが要件とされており, M.P.Ed.プログラムでは修士論文やメジャー・リサーチ・ペーパー（Major Research Paper: MRP）は課されていないため，当該プログラムで課される最終プロジェクトがここで言う「学術研究能力を示すもの」と認定されない限り, M.P.Ed.から Ph.D.への進学は事実上不可能ということになろう。他方で，Ed.D.では保有する修士号は教育的リーダーシップあるいは教育行政学における修士号が望ましいが，それ以外の領域の修士号であっても出願できることとなっており，M.A.の学位が認められないという記述はない。つまり，取得学位の観点から M.A.から Ed.D.への進学を阻む規定は特にないが，M.P.Ed.から Ph.D.に進学する場合，修士論文の執筆経験等研究能力を証明する業績が要件となる点で, これが大きなハードルとなることが考えられるし, Ed.D.と Ph.D.の入学要件の 2 つ目の大きな相違点と言えよう。その他には，Ed.D.入学に際しては GPA スコアが最低でも 3.5 あることが要求されるが，Ph.D.では成績が A（80%）以上が求められる。成績の A とは通常 80

－89％を指し，GPA に換算するとこの得点域に当たるのは３である。つまり GPA スコア 3.5 とは大体 85％当たりと同等と考えられるものであり，両プログラムでほぼ同等の成績が求められると考えていいだろう。

就学形態としては，双方ともにフルタイムのプログラムである。他方で，M.P.Ed.と M.A.の比較で言及したことと同様，Ed.D.では一学期に１ハーフコースの履修が想定されているが，Ph.D.では３ハーフコース履修することとなっている。これは就学中の就業の可能性あるいはその必要性とも関連するものとも思わる。即ち，「就学中，就業することは可能か（Do you have the ability to maintain full-time employment?）」という問いに対し，Ed.D.では「YES」と回答しているのに対し，Ph.D.では「NO」となっている。一学期１ハーフコースの受講であれば就学中の就業も可能であるが，３ハーフコースになるとほぼ不可能という判断があるのであろう。この就学中の就業可能性とも関連するだろうが，Ed.D.がオンライン形式の受講形態を採用しているのに対し，Ph.D.が対面形式を採っているのも，両者の大きな相違点として指摘できよう。また，Ed.D.ではプログラム上一つの大きな特徴となっているコーホート・モデルも，Ph.D.では全く言及されていないため，採用されていないものと思われる。

プログラム内の領域数としては，Ed.D.が教育的リーダーシップ領域のみであるのに対し，Ph.D.は４領域から構成されている。Ed.D.の領域に該当する M.P.Ed.の領域が教育的リーダーシップ領域と先住民教育における教育的リーダーシップ領域のみであるのに対し，Ph.D.の４領域は M.A.の４領域と同様のものとなっている。この相違性は，実践家向けプログラムとしては修士レベルで一定の専門性を身に着けることができ，必ずしも博士課程に進学する必要はないが，研究者向けプログラムとしては M.A.と Ph.D.の連続性を持たせなければならないという, 両プログラムに進学する学生の将来の志向性によるものと思われる。

修了要件としては，Ed.D.が 10 のハーフコースの習得が求められるのに対し，Ph.D.では６ハーフコースの習得と Ph.D.資格試験の合格及び Ph.D.論文の執筆とされている。これも M.P.Ed.と M.A.の比較で言及したことと同様，Ph.D.では Ed.D.よりもコースワークが少ない分学位論文執筆に向けての一連のプロセスを完遂させなければならず，これが両者を差異化している最大の要因であると言えよう。但し，上述したことであるが，留意すべきは博士論文執筆にはその前段階でプロポーザルを作成し倫理審査を受ける必要があるなど一連のプロセスがあり，それらをすべてセットとして考えると，単に博士論文を書く書かないという問題以上に大きな相違を生み出しているということも事実であろう。但し，M.P.Ed.で課される最終プロジェクトのように, Ed.D.でも「組織改善プラン（Organizational Improvement Plan: OIP）」の作成が求められ，その修了までには一連のプロセスを踏まえることが要求される。Ed.D.と Ph.D.の違いを認識するには，最終的には博士論文と OIP の違いを認識する必要があるが，それは現時点までで得られた情報からはできない。現地調査によって明らかにする必要がある。

おわりに

以上, ウェスタン大学教育系大学院における M.P.Ed.と M.A., 及び Ed.D.と Ph.D.の比較分析を通して，教育実践家向け学位プログラムと研究者向け学位プログラムの類似点と相違点について明らかにしてきた。但し，本稿ではウェブサイトで得られる情報を基に分析を行ったため，本稿執筆次点では未だ推測の域を出ない点も散見される。それらについては，現地調査等の実態調査を通して明らかにしていきたい。

カナダ大学協会（Universities Canada）ウェブサイト[24]に記載されている各会員大学のウェブサイト[25]によると，カナダ国内の少なくとも英語系大学において M.Ed.（ウェスタン大学では M.P.Ed.）と Ed.D.という，教育実践家向け学位プログラムを修士及び博士両課程において有している大学は，ウェスタン大学の他，OISE，アルバータ大学，カルガリー大学，ブリティッシュ・コロンビア大学の５大学のみである（平田，2021b）。これら大学はすべて研究者向け大学院学位プログラムである M.A.と Ph.D.も有している。これらの中で筆者がこれまで検討対象としてこなかった大学に関しても，本稿及び本誌掲載の別の拙稿（平田，2021a）のようなプログラム間の比較分析を行うことによって，カナダの諸大学における M.Ed.（M.P.Ed.）や Ed.D.といった教育実践家向け学位プログラムが有すべき要素というものが全体として見えてくるものと思われる。その際導出される諸要素は，日本の教職大学院で博士課程（Ed.D.に相当）を新設する際に，きっと有益な視点を提示してくれるものと思われる。なぜなら，教職大学院で日本版 Ed.D.の新設を検討する際，それが現在の教職大学院で提供される教育専門職向け修士の学位である「教職修士（専門職）」プログラムとどう差異化されるべきか，あるいは従来の教育系大学院で提供されてきた「博士（教育学）」とどう差異化されるべきかという論点が必ず浮かび上がってくるであろうからである。この点について今津（2017）は，2006 年に創設された名古屋大学大学院教育発達科学研究科 Ed.D.コースのあり様を，Ph.D.と Ed.D.との比較を通して検討している。日本における数少ない Ed.D.に関する研究としての価値は無論高いが，詳細な検討が行われているわけではないことは否定できないし，教職大学院で授与される「教職修士（専門職）」と当該 Ed.D.学位の比較検討は，その当時双方ともに設置からそれほど時間が経っていなかったせいもあってか，なされていない。また，アメリカにおける Ed.D.と Ph.D.の違いについては，小川（2002）や黒田（2014），白畑・新保・北山（2015），新保・高根・長倉・白畑（2016）等において検討されているが，日本への応用可能性を議論するのであれば比較対象はアメリカ一国だけでは不十分であろう。筆者を含めて多くのカナダ研究者（教育に限定しない）が指摘するように，一般的には隣国アメリカと同一視されることもあるカナダであるが，その国家社会のあり様を知れば知るほど，隣国アメリカとは極めて対照的な国であることがよくわかってくる。むしろ岩崎（2002）が指摘するように，自由より平等を重視する傾向にあること（国民皆保険制度等の社会保障制度等に見られるように，国家介入を嫌悪するのではなく社会は国家の役割を認めていること），議院内閣制を採っていること，超大国ではないこと等日本との類似点を勘案すると，日本との比較対象としてはアメリカよりもカナダの方が適しているとさえ言えよう。また，例えば学校選択制度やチャーター・スクール制度[26]など，アメリカ発の教育改革事項が日本での導入を検討される場合，同様の改革事項が既にカナダでは実施されている場合も少なくない。その際，カナダではアメリカの改革事項をカナダの文脈に応じてアレンジを加えつつ導入している。つまり，その意味では日本にとってカナダは「応用例」の先例となり得る。こういった点を考慮しても，アメリカだけでなくカナダの例も比較分析の遡上に載せた方が，より多面的なアプローチが可能となるだろう。今後は，名古屋大学大学院（今津，2017）（松下，2010）や広島大学大学院（大橋・上野，2009），静岡大学大学院と愛知教育大学大学院の教育学研究科共同教科開発学専攻（白畑・新保・北山，2015）（新保・高根・長倉・白畑，2016）などの日本における先例の分析から得られた知見と併せて，検討する価値があろう。また，現在は教職大学院制度化から 10 年が過ぎ，そのあり様を再検討する時期に来ていると言ってもよいだろうが，「教職修士（専門職）」と同

[24] https://www.univcan.ca/universities/member-universities/（2020 年 10 月 21 日採取）。
[25] （平田，2021b）巻末に，カナダ大学協会会員大学 URL 一覧を付しているので，参照されたい。
[26] カナダ諸州の学校選択制度導入状況やチャーター・スクールをカナダで唯一制度化しているアルバータ州の状況については，拙著（平田，2020c）を参照されたい。

趣旨の学位である M.Ed.については，これまで研究上詳細に考察されることがほぼなかった。そういった意味でも，本科研費研究を通して筆者が行っている問題提起は，一定の価値はあろう。

本稿執筆以降は，ウェスタン大学に関する実態調査実施を見据えながら，Ed.D.プログラムを有するその他の大学院調査に向けた展望を構想することとするという，今後の筆者の研究計画を述べることで，本稿を閉じたいと思う。

【参考文献】

- 平田淳（2019）「カナダ・ブロック大学大学院における M.Ed.プログラムの実態の諸側面－担当教員の認識に関する質的分析－」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第 4 巻，69－91 頁。
- 平田淳（2020a）「カナダ・オンタリオ州における「教員追加資格（Additional Qualifications. AQ）」に関する一考察」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第 4 巻，64－87 頁。
- 平田淳（2020b）「トロント大学オンタリオ教育研究所における教育実践家向け学位プログラム（M.Ed.・Ed.D.）及び研究者向け学位プログラム（M.A.・Ph.D.）の類似点と相違点－「リーダーシップ・高等・成人教育」研究科「教育リーダーシップと政策」プログラムを題材として－」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第 4 巻，128－151 頁。
- 平田淳（2020c）『カナダの「開かれた」学校づくりと教育行政』東信堂。
- 平田淳（2021a）「カナダ・ウェスタン大学（Western University）大学院における M.P.Ed.（Master of Professional Education）及び Ed.D.（Doctor of Education）プログラムの比較分析」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第 5 巻，43－64 頁。
- 平田淳（2021b）「カナダの大学院における M.Ed.及び Ed.D.プログラムの設置状況」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第 5 巻，25－42 頁。
- 今津孝次郎（2017）『新版　変動社会の教師教育』名古屋大学出版会。
- 岩崎美紀子（2002）『行政改革と財政再建－カナダはなぜ改革に成功したのか－』お茶の水書房。
- 黒田友紀（2014）「米国における専門職学位 Ed.D.をめぐる議論の検討」『教育開発学論集』第 2 号，149－156 頁（https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3133&item_no=1&page_id=13&block_id=21，2021 年 1 月 5 日採取）。
- 松下晴彦（2010）「研究大学における Ed.D.プログラムの意義－名古屋大学『教育マネジメント』の事例－」『名古屋高等教育研究』第 10 号，181－197 頁（http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no10/11.pdf，2021 年 1 月 5 日採取）。
- 小川佳万（2002）「学位からみたアメリカ教育大学院―その特質と問題点―」『名古屋高等教育研究』第 2 号，161－184 頁（https://nagoya.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=14647&item_no=1&page_id=28&block_id=27，2021 年 1 月 5 日採取）。
- 大橋隆広・上野哲（2009）「高等教育政策と大学の自己変革－広島大学大学院教育改革支援プログラム『Ed.D.型大学院プログラムの開発と実践』における取組をてがかりに－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第 58 号，55－64 頁（https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/2/28643/20141016164937784535/BullGradSchEduc-HiroshimaUniv-Part3_58_55.pdf 2021 年 1 月 5 日採取）。
- 新保淳・高根信吾・長倉守・白畑知彦（2016）「米国における Doctor of Education プログラムとの比

較から見える共同教科開発学の特性」『教科開発学論集』第 4 号，185－191 頁（https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3098&item_no=1&page_id=13&block_id=21，2021 年 1 月 5 日採取）。

・ 白畑知彦・新保淳・北山敦康（2015）「本共同教科開発学専攻の今後の方向性－国内外の Doctor of Education（Ed.D.）の実態調査に基づいて－」『教科開発学論集』第 3 号，181－187 頁（https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3117&item_no=1&page_id=13&block_id=21，2021 年 1 月 5 日採取）。

【附記】

・ 本稿は，独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（C）（一般））「JSPS 科研費　JP18K02283」の研究成果の一部である。

（2021 年 1 月 29 日　受理）